

地域医療連携室

フレンドリーだより

Community medicine cooperation room

1W

地域医療支援センター
がん相談支援センター
かんわ支援室

Medical Community Network & Discharge Planning
Cancer Resource Center
Palliative Care Support



2016
vol.50

H28.10 発行

黒部市民病院 黒部市三日市1108-1

E-mail : friendly@med.kurobe.toyama.jp

C型肝炎治療の変遷



消化器内科部長
辻 宏和

4月より内科に赴任しました辻宏和です。黒部出身ではありますが今は昔で、通った三日市小学校は前沢小学校との統合で桜井小学校になり、桜井中学校は宇奈月中学校との統合を控えて建て替えの真っ最中、高校時代に揺られた国鉄はJRを経て更にはあいの風とやま鉄道となり、電鉄桜井駅も電鉄黒部駅、変わったものの多さに月日を感じます。それでも診察で患者さんと話をしていると話しぶりに懐かしさを感じ、心地よく感じている自分がいます。

さて、私の専門は消化器内科ですが、この分野で月日を感じるものの一つにC型肝炎の治療があります。私が医師としてスタートした1992年は、ちょうど直前の1989年にそれまで非A非B型肝炎とされていた肝炎群の中からC型肝炎ウイルス（HCV）の遺伝子を取り出され、抗体検査キットも開発され、あわせて1992年にはHCVウイルス血症にたいするインターフェロン治療が保険承認され、まさに臨床でC型肝炎の診断・治療が始まった元年でした。医師1年目で担当した患者さんの約半数はインターフェロン治療といった具合で、多くの方が入院しておられました。患者さん方はまさにインフルエンザ様の発熱を毎日ビュンビュンだしながら、食欲が落ちたりしながら、耐えつつ治療を続けていました。そんなに苦労しながらの治療でしたが、残念ながら後々の解析ではインターフェロン単独ではC型肝炎ウイルスをノックアウトして体から追い出すことに成功した人は数%の少数にとどまり、満足のいく成績ではありませんでした。それ以降のC型肝炎治療は、より効果のある薬剤の開発、そして効果

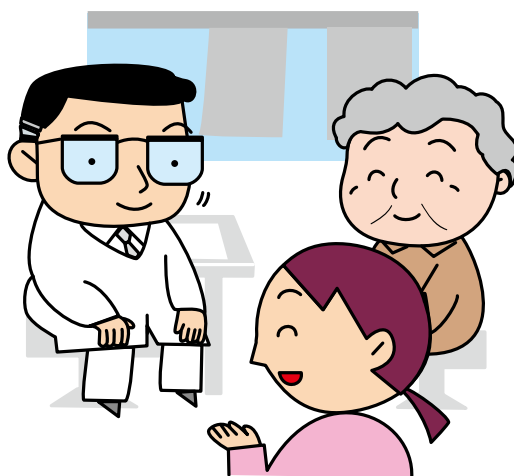
の期待できる患者さんの選択、の積み重ねでした。インターフェロンの体内での作用時間を長くするようにしたり、他の薬剤と組み合わせたりなど、改良を行い少しずつ少しずつ治療効果が上積みされてきていました。とは言っても、土台となる治療はインターフェロンであり、例えば貧血があったり血小板が減少している方、自己免疫性疾患を患っておられる方、高齢の方などインターフェロンを使用しづらい患者さん方に対しては治療には踏み込めないままという時代が20年間続いていました。



そこに革新的な治療の進歩が起こったのが2014年のことで、インターフェロン注射に頼らずに1日1～2回薬を飲むだけでC型肝炎の治療を行うことができるようになりました。すなわちインターフェロンが使えず、それまで治療困難とされていた患者さん方、インターフェロン治療を何度やってもうまくいかなかった患者さん方にも治療の道が開けたのです。治療開始時の入院も不要となりました。結果、老若男女をとわず多くの患者さん方が「先生、やっとウイルスがいなくなった」と喜ばれるのを目のあたりにできるようになったのです。この治療法も改良が続けられ、当初は24週間、約半年間の内服が必要でしたが、最近の第2世代では12週間の内服で済むようになり、そして98%の患者さんでHCVを体から追い出すことに成功するまでになりました。24年前には、「C型肝炎ウイルスって、なんてしぶとく、なかなか体から排除できないウイルスなんだろう」と感じていたのが、今や「お薬を飲み忘れずに12週間飲めば、100%とはいいいませんが98%の方はウイルスがいなくなりますよ」とお話しできるようになり、治療の様変わりを感じます。

一方で、ウイルス性肝炎検査を受けたことがある方は、実はこれまでの累計を合計しても約半分くらいの方にとどまっています。せっかく良い治療法が開発されてきているのに、非常にもったいないことだと思います。全ての国民が一生に1回はC型肝炎やB型肝炎の検査を受けることを目標にした国を挙げての取り組みがつづけられており、先生方の診察室にも「初めて肝炎検査でひっかかったんだけど」という方が受診される機会もあるかと存じます。ぜひ、治療に結びつけるよう、ご紹介いただければと思います。

もちろん肝炎だけでなく、消化管、肝胆膵全般を、消化器専門医5名で診療にあたっていきたいと考えております。どうぞよろしく願いいたします。



炭酸レーザー治療について



耳鼻いんこう科医長
塚田 弥生

炭酸レーザー治療とは、アレルギー反応がおこる場である鼻粘膜をレーザー照射によって変性させ、花粉やハウスダストなどの抗原が入ってきてもアレルギー反応を起こしにくくする治療です。

その結果、くしゃみ、鼻水、鼻づまりの症状をおさえることができます。

レーザー治療は、鼻の穴から内視鏡を入れ、炭酸ガスレーザーを照射して、鼻腔 [びくう] 内の下鼻甲介 [かびこうかい] 粘膜を焼灼する治療です。約60分の鼻内局所麻酔の後、10～15分程度でレーザー治療を行います。ジリジリと粘膜が焦げるような音と煙、わずかな刺激 (熱い感じ) がありますが、痛みや出血はほとんどありません (個人差はあります)。

治療後7～10日は、症状が一時的にひどくなることがあります。照射部にかさぶたができるので希望があれば1～2週間後に受診していただきます。そのため、粘膜の状態が安定するまでは、飲み薬を続けてもらうことがあります。約1カ月で鼻症状は改善します。治癒率は鼻詰まりで90%、鼻水・くしゃみは薬と同等の70%程度です。

本治療の時期ですが、花粉症などある季節に症状があつて、困っておられる方は例年症状が始まる時期の1、2カ月前までに治療を行うと憂鬱な季節を快適に過ごすことができます。春のスギ花粉は冬の間に、秋のカモガヤ、ブタクサ、ヨモギなどは夏の間に治療していただければと思います。ハウスダストは症状がひどくなる春秋を外して、夏か冬が適しています。

レーザー治療の効果が持つのは半年から数年ですが、後遺症がないので、毎年受けることもできます。治療の回数を重ねることに、治りが良くなるようです。

レーザー治療が受けられるのは原則中学生からですが、中学生は怖がりの方では難しい場合もあります。子どもは鼻粘膜の再生も早いので、効果があまり長持ちしないといわれています。費用は保険3割負担で約9,000円。保険1割負担で約3,000円です。



鼻中隔彎曲症や副鼻腔炎のある患者は、それぞれの治療を併用しなければ、十分な効果が得にくいです。

2014年は20人、2015年は29人の方がレーザー治療を受けられています。年齢は13歳から86歳であり、幅広く治療を受けられています。



年間を通して11月、12月の花粉症前の時期に受ける方が多いようです。

現在、当院耳鼻いんこう科では水曜日、木曜日の午前中 (10時～) に2人程度で予約制となっております。ただし、複数回、レーザー治療を受けている方以外は、レーザー治療前に受診が必要となりますので、よろしくお願いたします。



レーザー治療は治療 (処置) 時間も短く、日帰りできる手術で気軽に受けることができます。ですが、治療はあくまで鼻炎治療の選択肢のひとつです。治療を受ける前に治療内容や治療後の事に関してよく理解したうえで受けていただきたいと思います。

中央処置室のご紹介

外来師長 能登 敦子

平成27年9月の新外来棟完成に伴い、新たに中央処置室が開設されました。場所は、中央棟1階の中央採血室横、そして内科外来（1階）の向かい側となります。中央処置室を利用される方は、ゆっくり横になっていただけるよう6床のベッドと1台のストレッチャーを備えています。

処置室という名前から“処置をする部署”と思われる方が多いと思います。業務内容の現状は、旧外来での内科処置室業務を引き継ぐと共に、開設前は救命センターで行ってきた各診療科の点滴や処置などを行っています。具体的には、診察前の血圧・体重測定、輸血や様々な点滴・注射などに加え、胸腔穿刺、トロッカー挿入などの処置や骨髄穿刺、呼気テストなどの検査も行っています。また、急に気分が悪くなられた方や、診察まで横になって休みたい方などの対応も行い、すべての外来ブロックの要求に応じられるように努力しています。

開設されて半年が経ちました。スペース、設備共に十分とは言い難い環境ですが、一人でも多くの方に安心して利用していただけるように、日々創意工夫、鋭意努力をしています。担当は、主に内科外来スタッフですが、各診療科や病棟からの心強い応援を頂きながら乗り切っています。不慣れな点はありますがスタッフ一同、笑顔と気配りを忘れずに、各診療科との情報伝達や連携を確実にし、安心・安全な治療検査が受けられるよう支援することを目標にがんばっていますので、どうぞよろしくお祈りします。

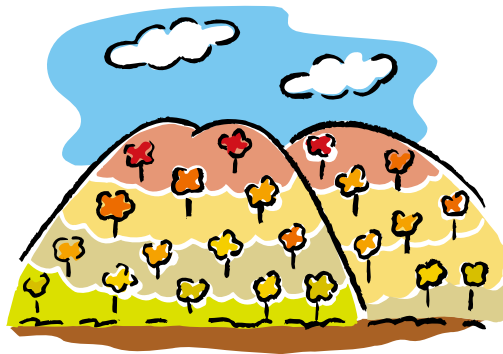




平成28年度第1回 新川地域連携パス脳卒中症例検討会

7月21日19時より、当院講堂において新川地域における連携パス脳卒中症例検討会が開催されました。

今回は、当院にて脳梗塞で入院された患者様が早期に丸川病院へ転院し、在宅復帰された症例でした。回復期リハビリ病院担当者においては、急性期の状態から転院までの経過を知ることができたこと、急性期病棟担当者からは、退院時の状態からリハビリの継続によって回復された変化を知ることができたとの感想がありました。また家屋調査の様子も伺うことができ、その重要性を学ぶことができました。それぞれの役割を再確認し、自由な発言の機会があったことで、他職種間の理解と連携が深まったように思われます。共通のパスを使用し、他職種連携がさらに深まっていくよう症例検討会を重ねていくことが望ましいと思われました。



講演・勉強会のご案内

1. 新川胸部疾患検討会

日時：毎月第2木曜日
午後6：30～
午後8：00

場所：中央棟3階 会議室6

2. オープンベッドカンファレンス

日時：偶数月の第2水曜日(不定期開催)
午後6：45～
午後7：45

場所：中央棟3階 講堂

3. 内科カンファレンス

日時：毎週火曜日
午後6：30～

場所：中央棟3階 会議室6